

---

# 無限の欲望は愚者を喰らう

火水木金土符「賢者の舞」

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無限の欲望は愚者を喰らう

### 【Nコード】

N0407Z

### 【作者名】

火水木金土符「賢者の舞」

### 【あらすじ】

私は無限の欲望、ジェイル・スカリエツィ。まあ…中身は普通の日本人のだがね。これはそんな私と転生者による戦いの物語だ。さあ、転生者諸君！私の欲望が満ちるまで存分に遊ぼうかつ！  
おーいウーノー！あらすじってこんなでいいよねー？

## 欲望の産声

ゴポッ

粘度の高い緑色の液体に満たされた水槽の中で目を覚まして一番初めに見たのは、ガラス越しに俺を見て騒ぐ数人の白衣を着た科学者らしき人間だった。

目の前の科学者達は「ついにアルハザードの技術を我々の手で！」や「科学による人間の創造を成しえた！」等と意味のわからない事言っている。

…意味のわからない？

いや、わかる…『俺』にはわからないが、『私』にはわかる。

アルハザードとは進みすぎた科学によって滅びた文明だ。

そして彼らは、アルハザードの技術によって『私』を生み出した。しかしわからない事もある。

『俺』は何故『私』として生まれてきた？

『私』の中に何故『俺』がいる？

違和感を感じた瞬間に、脳が焼けるように熱く感じた。

意識…が途絶え…る。

気絶する直前、科学者の一人が俺に声をかけたきた。

「0歳の誕生日おめでとう。アンリミテッドデザイン無限の欲望、ジェイル・スカリエツ  
テイ。」

## 動作テスト

ここは何処？

目を覚ましたら、見知らぬ部屋のベッドで寝ていた。着た覚えのない病院で入院している人が着る、患者衣を着せられている。俺が寝ている間に何があったんだ？

「おお、目が覚めたか！体に異常は無いかね？」

「っ！？ええ、ありません。」

突然、部屋に取り付けられたスピーカーから老人の声が聞こえた。かなり驚いたけど、すぐに気を取り直して冷静に振舞う。「私」ならそういう反応をするだろうから。

「それなら良い。現代の機械で精密検査を行い、健康だと判断されたが、ロストテクノロジーで創られた君の身体はその程度では安心できないからね。うむうむ、これで懸念事項は1つ消えたな。」

老人が話している間、目がさえた俺は混乱と沈静を繰り返していた。答えを知らない筈の疑問がいくつも浮かび混乱するのに、すぐに「私」の知識によって疑問が解決する。わけが分からない。

「俺」の知らない知識を何故持っている？ 「私」が創られた時に知識を脳に入れられた。

「私」とは誰なのか？ アルハザードの技術によって生み出された人間。

『私』は何故創られたのか？ 扱う事がほぼ不可能なロストテクノロジーを研究し、扱わせる為。

『俺』は何故『私』として生まれた？

『私』の中に何故『俺』がいる？

「それでは、これから簡単なテストをしてもらおう。今から職員が向かうから待っていてくれ。」

「はい。わかりました。」

老人が俺に話しかけると、すぐに思考を切り替えて返事をする。

頭の回転が早くなったな、と思つたら『私』がそういう風に創られたからと答えがだされる。

それを皮切りに、また思考の海に埋没しそうになった時、プシューと音を立てながらドアがスライドして開いた。

「はあ、はあ、本当だ！主任の言った通り、ディザイアプロジェクトが成功したんだ！」

息を切らしながら部屋に入ってきたのは20代後半の白衣を着た男性だ。激しい運動に慣れていなさそうな細い体で全力疾走したのだろう。汗をかき、顔を真っ赤にしている。

だが、疲労で辛そうにしていた表情は、俺の姿を見た途端満面の笑みに変わった。

「ふふふ、これから君に不備がないかテストさせてもらおうよ。まあ、我々の研究成果に不備があるとは思えないけどね！」

その後、無駄にテンションの高い男性から簡単な質問、軽い運動をさせられた。

それらが終わった後、用途のわからない30cmほどの棒状の物体を手渡される。片側の先端に宝石のような丸い物で装飾がされているが、それ以外に目立った箇所はない。

「これは何でしょうか？」

「そういえば、君には我々では再現できないロストテクノロジーの知識と、言語やある程度の常識以外入れられていなかったね。それはデバイス、魔法の発動を補助するものさ。簡易の物だけだね」

魔法？ありえなくはないか。『私』の中にある『俺』も魔法じみた事だしな。

「魔法はデバイスを通して私が発動させるから、君はそれを持っているだけでいい。」

白衣の男性が懐から出したノートパソコンのような物を操作し始める。

10秒ほど経つと、俺の周りに3個の光球が出現した。

これが、魔法か。

「よし！リンカーコアも問題なく生成されてる。これで最低限の動作は保障されたな。今日のテストはこれで終わりだよ。明日以降もしばらくテストが続くから、十分に休憩をとってね。」

そう言うと、白衣の男性は部屋を出て行った。

再び一人になったので、今度こそ思考の海に沈む。わからない事だらけの現状を確認するために。

それから数日後、俺が過ごしていた研究所らしき施設から出る事になった。

俺の機能は問題ないと判断されたので、お披露目の為にお偉いさんと面会させるそうだ。

「ほう、これがあのアルハザードの技術によって創られた人間か。」

「これがロストテクノロジーやロストギアの研究に成功すれば、時空管理局の地位は更に高まるな。」

「ふん、高まって貰わねば困る。これを創る為にどれだけ経費がかかったかわかっておろう。」

俺の目の前で最高評議会という、時空管理局のトップ3が話し合っている。

これが時空管理局のトップ。身体を棄て脳髄だけになっても、生き続ける人間か。

この生への欲望を見ていると、彼らの方が無限アンリミテッドの欲望の名に相応しいと思えてくるな。

「それではジェイル・スカリエッティには研究設備を与え、自由にさせる。ただし、我々が用済みと感じれば即刻廃棄する。これでよろしいかな？」

「異議なし。」

「問題ない。話はこれで終わりだ。ジェイル・スカリエツィ退室しろ。」

「はい。失礼します。」

ククク、これや廃棄とは、俺を人間として見ていなかったな。まあいい。

この世界が『魔法少女リリカルなのは』だという事はとっくにわかっている。

原作介入に必要ななる、技術という名の武器を活かせる研究設備を用意してくれるんだ。あの程度で奴らを恨みはしないさ。

ああ！それにしても楽しみだ！物語の主人公たちが『俺』の欲望を満たしてくれますように。

**動作テスト（後書き）**

最高評議会の口調は適当です

シリーズがログアウトしました(前書き)

最初の予定を変更してナンバーズの登場を早めます  
行き当たりばったりですいません

## シリアスがログアウトしました

無印開始の32年前、私専用の研究施設を与えられる。数人の局員が監視に付く。

半年後、違法研究の開始に伴い、情報規制の為監視が外される。

無印開始の30年前、プロジェクトFの基礎が完成。

正式名称はプロジェクトF A T E、記憶転写型のクローンを造る技術。

原作ではスカリエッティが基礎を作り、プレシア・テストロッサが完成させた。

将来、この技術によってフェイト・テストロッサとエリオ・モンデイアルが誕生する。

また、プロジェクトFの基礎の完成と同時に戦闘機人の開発に取り掛かる。

無印開始の26年前、魔道実験の事故に巻き込まれ、アリシア・テストロッサが死亡。

プレシア・テストロッサに接触し、プロジェクトFの研究データを渡そうとするが、私の不審な動きを警戒した最高評議会によって妨害される。

その後、プレシア・テストロッサは地方に異動、辺境にて行方不明になる。

プレシア・テストロッサが行方不明になってから1カ月後、何者かによって研究所が襲撃され、プロジェクトFの研究データが強奪される。

無印開始の24年前、戦闘機人ウーノが完成。

最高評議会が指示した細胞を使用。

原作と同じ容姿、技能を持った個体が完成した。すでにドゥーエからディードまでの細胞も最高評議会から指定されている。

原作知識の中に、どの細胞を使って戦闘機人を作製したかなんて情報なんて無いからね。

戦闘機人に使用する細胞が原作の私が選んだ物でなくて助かったよ。おかげで原作通りの戦闘機人を造る事ができる。

「ここまで原作との大きなズレは無い。このまま世界が原作通りに進めば、聖王のゆりかごと原作知識を使い、私が次元世界の王となる事も夢ではないか。クツクツク、ハーツハツハツハ！！」

「ドクター、落ち着いてください。また影響を受けています。」

「はっ！？厨二病が！？はあ…この身体は相変わらず油断すると黒歴史な台詞言っな。」

何故かスカリエツティに転生してしまった俺だが、元は普通の一般人だ。

当然、次元世界の王になろうとしたり高笑いみたいな痛い事はしなかった。

しかし、精神が肉体に引つ張られるというやつか、この身体になつてから厨二的な思考や言葉を使ってしまう時がある。

スカリエツティとして生まれたばかりの頃は格好を付けて、何故『私』の中に『俺』が居る！とか考えていたが、わかりやすく言うと、普通状態の時が『俺』、厨二病全開の時が『私』だ。

まあ、そのなんだ…改めて思い出しても背筋がぞわつとするし、もう考えるのはよそう。

今は助手のウーノが俺の暴走を止めてくれるから、すぐに正気に戻

れるしね。

「俺は一般人らしく普通でいたいんだ。次元世界の王なんてやってられるか。」

「一般人は自分の研究施設を襲撃した相手に、研究データを投げつけたりはしませんけどね。」

ああ、あの時のプレシアさんは面白かったな。

意味も無く投げたUSBメモリが直撃して鼻血だしてるのに、娘を蘇らせることができるって言いながら大喜びだったからな。

自分でやっというてなんだけど、めっさシユールだったわ。

「偶に何かを全力で投げたくなる時ってあるよね。あれ？そういえばあの頃ってまだウーノって生まれてなかったよね？何で知ってるの？」

「別にドクターに奇行があるのは構いませんが、時と場合は選んで下さい。襲撃の件に関しては、ラボの機材に映像が残っていたので拝見しました。」

「そか。襲撃した犯人が管理局にばれて、指名手配されたら原作からずれるだろうし、映像は消去しといてな。」

「わかりました。」

すでにウーノには、原作知識について話している。

真面目で冷静なウーノになら話しても大丈夫だと判断したからだ。

自分の娘に隠し事するっていうのも面倒だしね。

無印開始23年前、戦闘機人ドゥーエが完成。

最高評議会が指示した細胞を使用。

ウーノと同じく原作と同じ容姿、技能を持った個体が完成した。

原作知識を教えた後、管理局に潜入してもらう。

ただし、原作でドゥーエが死亡した原因となったレジアス・ゲイズの暗殺をしないように厳命した。

「仕送りありがとうございます。ただ、一つ気になる事があるのですが、アンパンのみが大量に送られてきたのは何か意味があるのでしょうか？」

「金魂の死の呪文みたいな名前の奴が長期戦にはアンパンだって言ってた気がする。」

「…次からはアンパン以外の物を送ってください。そろそろ勤務時間ですので失礼します。」

管理局で頑張ってるドゥーエに、ネタでアンパンを50個ほど送ってみたけど、お気に召さなかつたらしい。

久々に連絡取れたと思ったら、文句言われてしまった。

「（大好きなドクターの送ってくれた物ですし、多分一人で全部食べるのでしょね。はあ…ご愁傷様です。ドゥーエ。）」

シリアスがログアウトしました(後書き)

スカリエツティは親としてナンバーズに好かれている設定です

主人公はスカリエッツィではなくスカさん（笑）です

無印開始の22年前、戦闘機人トーレが完成。

最高評議会が指示した細胞を使用。

原作と同じ容姿、技能を（ry

トーレは初の戦闘を目的とした戦闘機人だ。

何故、研究の補佐、情報の整理を目的としたウーノや潜入、諜報活動を目的としたドゥーエが先に造られたのに原作のスカリエッツィは『戦闘』機人って名前を付けたのだろうか？

原作の知識があるおかげか、戦闘機人の開発は順調。

このままいけば、原作よりも早くナンバーズを製造できる可能性が高い。

「先ほどからずっと私を見ていますがどうしたのですか？」

「トーレより後の娘は変わったのが多いんだよなあって思ってたんだよ。」

「変わったの…ですか？」

「うん。性格悪かったり、幼児体形だったりするの。」

「ドクターが製造中に調整すれば改善されるのでは？」

「んにゃ、そのままの方が面白いから調整しない。」

「ドクターも少し変わってますよね。」

「自覚はしてる。」

「トーレ完成から4ヶ月後、ガジェットドローン？型が完成。製造中のクアットロ、チンクの調整が終わってしまい、やる事が無くなったので暇つぶしに造ってみたら3日で完成した。」

「どうして、たった3日でこれが造れるのか自分でもわからない。自分の頭の中の構造が気になるが、さすがに脳を解剖して生きていられる技術は無いので諦める。」

「無印開始の21年前、幻の聖剣を発見。」

「ドゥーエから送られてきた管理局の情報を頼りに、ロストギアを探索。」

「トーレの戦闘データを取るついでに回収に向かってもらう。」

「その結果、とある無人世界で謎の剣を発見した。」

「ドクター、今回トーレが発見したロストギアの解析が終わりました。この剣で攻撃対象を斬った場合、相手に与える損傷をほぼ0にしてみてくださいようです。」

「それって意味あるのか？」

「剣自体は強力な物なので斬る以外の使用方法：例えば投擲すればかなりの威力を期待できるかと。」

「それなんてエクスカリパー？」

「ん？そういえばチンクの先天固有技能：ISインヒューレントスキルって、一定時間で触れた金属を爆発物に変化させる能力だったよな。」

「そして使う武器は投げナイフのステインガー。」

「これをエクスカリパーのパチモンのエクスカリパー（仮）に変えれ」

ば…

「偽エクスカリパー約束された勝利の剣で壊れた幻想キター！ウーノ！それを投擲用ブローケンファンタズムに改造して量産するぞ！」

チンクアーチャー化魔改造計画始動。

アーチャーの技はオタクの浪漫です。

エクスカリパー（仮）発見から半年後、戦闘機人チンクが完成。最高評議会が指示した細胞を使用。

原作と同じ（ry

先に製造していたクアットロより先に稼動。

エクスカリパー（仮）の改造、量産にはまだ成功していない。

ネタ武器の癖にガジェットドローンより構造が複雑なのにイラっとする。

「俺が理不尽な命令をした時は？」

「了解した。地獄に落ちろ、ドクター。」

「じゃあ、足止めを頼まれた時は？」

「時間を稼ぐのはいいが

別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？」

「いいぞ！その調子だチンク！」

「変な言葉を教えていたのはドクターでしたか…模擬戦中に痛い台詞を言われると気力を削がれるので止めてください。」

チンクにネタを仕込んでいたらトーレに怒られてしまった。

「はあ…これからチンクの教育は私がします。ドクターはこれ以上変な事を教えないでください。チンク、私が正しい言葉使いを教えるから付いて来い。」

「はい。それではドクター失礼します。」

俺を置いて行ってしまった。

チンクAIチャイ化魔改造計画が…

無印開始の20年前、戦闘機人クアットロが完成。  
最高評議会が指示した細胞を使用。

(ry

俺や姉のナンバーズとは上手くいっているが、チンクとは相性が良くない様子。

先に稼動したチンクと姉妹喧嘩が発生した。

「私の方が人生の経験は多いんだ。もつと頼っていいのだぞ?」

「あなたに頼ることなんてありません。稼動したのが高が半年程度早かったからといって、姉面しないでもらいます?」

「トーレ、あれが前に言った性格悪いのと幼児体系なのだ。」

俺は、少し離れた場所にてトーレと二人で姉妹喧嘩を見学している。面倒なので喧嘩を止めるなんて事はしない。

「あれは大丈夫なのですか?特にクアットロの性格は他のナンバーズと連携するのに苦労しそうですが…」

「ノリで改善しなかった。後悔も反省もしていない。」

「大丈夫じゃないのですね…」

我が研究に一片の悔いなし！

主人公はスカリエツティではなくスカさん(笑)です(後書き)

アニメと小説の時系列が違うのを知らずにプレシアさんがアリシアを生んだ年齢を計算してしまい

9歳でアリシアを生んだという危険な答えを出してしまいました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0407z/>

---

無限の欲望は愚者を喰らう

2011年12月11日01時55分発行